

小林昇青少年期・福島期 文書の「附属図書館」への 収蔵について

原田 哲史 (大28)



小林昇先生(左)と著者

1976~80年に在学したぼくは、1940~55年ご在職の小林昇先生(1916~2010年)とは完全にすれ違っていたが、在学中と名古屋大学大学院とで集中講義を受講したし、晩年には3度ご自宅に伺った。福大経済の卒業生で親友水田洋の弟子、かつ戦時中に瀕死の自分を助けた人と同じ「高槻市」の出身ということで、気に留めてくださった。フリードリヒ・リスト研究の大家の小林先生は、19世紀前半のドイツ経済思想を研究するぼくにその継承を望んでおられた。

一昨年出した『19世紀前半のドイツ経済思想』(ミネルヴァ書房)では第Ⅲ部でリストを扱い、第10章は「小林昇のリスト研究とこれから」である。お嬢さんの松本句子さんに贈ったら、示唆に富むご感想と、「父の青少年期・福島期の手書きを中心とした文書類をまとめて大学などに寄贈して、研究に役立てたいのですが、ご協力ください」というご依頼とをいただいた。そこで、福島大学附属図書館に寄贈をお願いしたところ、お受けくださった。

文書は、寄贈時の目録でⅠノート類、Ⅱ日記、Ⅲその他と区分された合計27点からなるが、細かく数えると30点

を超える(目録は <https://tetsushiharada.com> の「ブログ」の2021年9月9日に掲載)。コレクションとしては小ぶりだが、14歳から始まるノート類や昭和12(1937)~26(1951)年(ただし出征中は中断)の日記から、小林先生の初発でのご関心がつぶさに分かる。

なかでも日本の古代文学の気高さへの憧憬は顕著であり、青年期には——福島高商に赴任しても——古代精神を賞揚した詩人増田兎への心酔があった。小林先生は増田編の同人誌『狼煙』全15号(昭和14(1939)~19(1944)年)の全号に作品を寄稿されていた。それどころか、句子さんによれば、夭折した増田の作品を編纂するご意志を晩年ももたれていたとのことであるから、その関心は、歌人でもあられたご自身の内奥にあり続けたのである。小林先生が、戦後に大衆社会や「進歩的知識人」にさえ距離をおか

